

# 『伊勢新聞』に見る近代の志摩海女

## －明治・大正期の「海女」の諸相－

塚本 明

はじめに

志摩の海女漁は、歴史的にも現在でも、従事者の数や漁獲高、浦村にとっての社会的かつ経済的な比重の大きさなどの点で、日本列島の海女漁を代表する存在である。女性の素潜りによる漁は世界でも日本と韓国済州島でしか行われておらず、この特有の漁業形態を無形民俗文化財として世界的に評価しようという動きもある。

だが、志摩海女の歴史的実態について基礎的な文献資料を蓄積する作業は進んでいない。前稿「近代の志摩海女の出稼ぎについて」（本誌 10 号、2010 年）において、近代の志摩海女が明治 20 年代以降に北海道や朝鮮半島など国内外の各地に出稼ぎに赴く事象を分析したが、その際にも用いた『伊勢新聞』の明治・大正期の海女関係記事を一覧表にして本稿末尾に示し、ここから判明する事柄について、若干のコメントを付すこととする。

『伊勢新聞』は 1878(明治 11)年に津市で創刊され、自由民権派の知識人を中心に論陣が張られた、近代三重県を代表する新聞である。明治末年頃には年間 400 万部以上の発行部数を誇り、県内各地の諸事件を伝えていることから、三重県近代史を辿る上での基礎資料のひとつとなっている。この新聞に登場する志摩海女の記事の変遷は、その実態を知る上での手掛かりとなると共に、当時の社会が海女をどのように認識していたのかを反映するものと言えよう。

志摩の海女は歴史的に単なる漁業者なのではない。潜る能力を活かして海難救助に活躍することがあり、また近代以降には真珠養殖にも重要な役割を果たす。そして、古来、都びとが海女を表象として伊勢志摩の海を詠い、伊勢参宮の旅人が海女の潜水漁を見物することもあった。「観光海女」としての側面は明治末期以降に強まり、伊勢志摩の観光の目玉ともなっていく。こうした諸相を、明治・大正期の『伊勢新聞』の記事から辿ってみることとする。

## 一、海女の働き

### 1、海藻の漁況

明治前期に『伊勢新聞』に登場する海女は、専ら漁業者としてである。海女が採取する獲物として、この時期にはアワビやサザエよりも海藻類に関する記事が多い(一覧表では、海女が登場せずとも海藻に関する記事は採録している)。江戸時代末以降、中国向け輸出需要の拡大によりテングサを中心とする海藻類の価格が高騰し、海女漁の獲物としてテングサはアワビ以上に重要なものとなっていった。明治 14(1881)年 8 月 17 日や明治 17 年 7 月 15 日、明治 24 年 7 月 23 日の記事など、海藻の収穫が浦村の経済に大きな潤いをもたらしていることが示されている。

トコロテン、寒天の原料となる海藻として、テングサ以外にイギスというものが発見され、御木本幸吉が売り出し、買い取った志摩の中村某氏がひと月で 400 円の利益を得たと

の記事も興味深い（明治 26 年 9 月 3 日付。以下、適宜「M26/9/3」の如く略記する）。

またアラメも重要な獲物であり、その収穫高を報じる記事もある（M30/7/29、M35/8/29）。これらは明治 39 年 1 月 18 日付け記事に述べられるように、妖度（ヨード）に加工するためのもので、志摩地方で重要な産業となっていた（詳しくは石原佳樹「三重県志摩地方における明治期のヨード産業」『海と人間』29、2006 年 参照）、この前年には、アワビとアラメの豊漁により海女は 1 人 3、400 円の所得を得た者も居るという。

明治 16 年 2 月 16 日と 17 日には、和具村と布施田村との間で発生したアラメ刈り取りをめぐる争論・訴訟について、山田軽裁判所における審議経緯が報じられるが、この時期には食糧としてのアラメであったろう。漁業権を伴う海面の境界は、海底の岩礁が連続する所まで、という観念が存在していたことは興味深い。なお、両村同士の磯争いは江戸時代に遡る。宝暦 9(1759)年に布施田村の「あざみ磯」をめぐり双方の村人中が烈しく争い、船が差し押さえられるなどの騒動となった（「越賀村文書」）。この地域において、主に海女が従事する磯漁の比重の高さを思わせる事件である。

前稿で言及したが、明治前期には磯で採取する海藻が格段に重要度を増したがゆえに、磯焼けに伴う海藻類の不漁が志摩の浦村に深刻な影響を及ぼし、海女の出稼ぎを促進する要因のひとつとなった。だが磯焼けについて何の検討や対策もなされなかった訳ではない。明治 21 年 6 月 28 日に、往年は海藻の産出が少なかった伊豆が近年は却って増しており、志摩の磯焼けは潮流模様が海底の滋養分の欠乏が原因か、と報じている。水産学会委員山本由方氏は、移植の好結果を農商工報に載せ、新聞に転載しているが、そこでは石花菜（テングサ）は岩石に蕃殖し、移植は容易である旨を記す。明治 24 年 7 月 23 日には、近年のテングサの不漁は水産学上の大問題となり、その原因を巡り悪水潮流説、周期説、萌芽を喰い荒らす小虫説があることを紹介する。だがこの年にはやや回復の兆しがあった。

明治 44 年頃には状況は好転し、特にアラメの産出が多額に上り、浦村を潤した。山林の乱伐により淡水が流入したことが磯焼けの原因として植林に注意した結果、漸次沿岸一帯に海藻の繁茂を見た、とする（M44/7/12）。事の実否を判断することはできないが、山が荒れると漁業も駄目になるとの認識は古くから存在したようだ。

## 2、アワビ採捕と潜水器

大正 3(1914)年 7 月 27 日に「鮑採捕制限改正請願」との見出しで、志摩の漁業組合から知事に請願書が提出されたことが報じられている。三重県では明治 35(1902)年 8 月に公布された「三重県漁業取締規則」第 10 条において 3 寸 5 分（10.6 cm）以下のアワビは捕獲を禁じられていたが（詳しくは石原義剛「三重県の漁業取締規則」『海と人間』13、1986 年）、「水眼鏡」では実際よりも大型に見え、また浅瀬で修行中の若い海女は「フクダメ」と混同することもあり、意図せず規則に触れ、また不利を蒙っている。だが、実際には 2 寸 5 分以上のものであれば蕃殖上に何ら支障はないとして、安乗・国府・甲賀・志島・畔名・名田・波切・舟越（船越）・片田・布施田・和具・越賀・御座の漁業組合が制限の緩和を請願したものである。ただしこれが受け入れられた形跡はない。明治 45 年 4 月には、安乗村の「すま」という海女が 3 寸以下のアワビを採り、3 寸以下を採ることを禁じた規則違反ゆえ自分の食用にと捌いたところ、金色の珠が出現したとの話を伝えている。制限

の大きさは3寸ではなく3寸5分の誤りであり、また珠の逸話はともかくとして‘すま’に悪意がなければ、出荷制限と採取規制とが混同されていた可能性もある。

明治16年に潜水器（空気を補給するヘルメット型の器具）を用いたアワビ採取が志摩で着手されたことは前稿でも触れた（潜水器漁業については中田四朗「志摩沿岸の潜水器捕鮑漁業の展開」『海と人間』7、1979年）。『伊勢新聞』の記事と合わせ見ると、4月に神島の鮑採取権を得た山田岩淵町の箕輪（箕曲）亀哉（亀吉）は、7月には地元の者たちと連名で船越村で同様に潜水器を用いた漁の権利を得ている。また片田村の浜口清兵衛が所有する潜水器は、海底37尋（70m近く）の深さまで潜ることができるとする（M19/12/1）。

潜水器を用いれば、海女が通常は行き得ぬ暗礁にも手が及ぶため、明治17年の事例では、片田村で6日間で557貫目のアワビ、代金833円余りを得たが、これは海女の捕獲の数十倍にも当たると言う（M17/1/5。国府・甲賀村の好況は、M16/11/30）。長崎方面や海外で、潜水器を用いて盛んに漁をする様子も伝えられる（M26/7/14、同7/22）。

だが明治42年2月25日付の記事では、運転に数人の男子を要する点で収支が合わず、志摩の海女は潜水器よりも勝ることを指摘する。潜水器は、船上からポンプで空気を送り続ける必要があった。朝鮮半島において志摩海女の進出が続くなか、地元では潜水器を利用してこれに対抗しようとする動きがあったが、結局は経費の点で失敗に終わり、むしろ志摩海女を待たなければ作業が出来ない状態だ、との報道もある（T10/8/4）。

明治10年代以降に試みられた潜水器については、確かに海女の素潜りでは採り得ないところまで漁が可能のため捕獲量も大きく、ゆえに資源管理上の観点から規制が進むのだが、それ以前に経済効率の点で海女漁が優ったということもあったのではないか。

### 3、災害救助

江戸時代に志摩で船が難破した際、海中に沈んだ積み荷や船具の確認・引き揚げ作業に海女が活躍した。浦村にとって難船は、救助や事務的な処理の負担はあったものの、荷主からの人足賃・謝金、修理費用、痛んだ積み荷の入札払いなどを通して、得られる収益は大きかった。そして大事なことは、紀伊半島沿岸で数多く発生した海難事故処理において、人が潜って海底に沈んだ物資等を確認し、引き揚げる作業は、基本的に志摩の海女漁村に限られるという点である。漁業や廻船で成り立つ浦村の漁民でも、海中深く潜る技能は一般に持ち合わせてはおらず、それは海女だからこそ可能なことであった。志摩漁村における難船の発生は、同じ紀伊半島沿岸でも海女不在の地とは別の意味を持っていた。

もちろん物資の回収だけではなく、人命救助にも海女は活躍したに違いない。志摩以外の海女漁村でも同様であろう。慶長14(1609)年9月、スペイン領フィリピンからメキシコへ戻る途中のサンフランシスコ号が房総沖で座礁し、海女漁村で知られる御宿町の女性らが300人以上を救助した事件は、よく知られている。

江戸時代の海女の浦村における役割については、また改めて論じることにはしたいが、明治・大正期にも海難救助に活躍する海女の姿を見ることが出来る。最も大規模な事件は、明治44(1911)年11月に的矢湾入り口の菅崎海岸で発生した駆逐艦春雨艦の遭難事件であろう。横須賀から和歌浦に向け航行中の春雨艦は11月24日未明、荒天に見舞われ、的矢港に避難を試みたところ、岩礁に触れ艦底が大破損し、沈没した。急を聞いて救助に乗り

出した長岡村（相差村）と安乗村の住民ら、特に青年団や海女たちの働きは目覚ましいもので、いくつかの美談と共に語り伝えられている。遭難当時、僅かに海面に残る煙突にしがみついた水夫の救助にも、若い漁夫5名のほか女性2名が関与したが、遭難した艦員の死体を海底から引き揚げる作業において、特に海女たちが活躍した。この時に結局生存者20名に対して殉難者は43名にのぼるのだが、その全ての遺体が収容されたのである。12月5日には海軍大臣から長岡村に対して謝状が出されているが（恐らく安乗村にも同様に与えられた筈である）、同じ日に『伊勢新聞』は次のように報じている。

志州濱の女王 三名の蜷婦が果敢なき艦長の骸を抱く

志摩国菅崎沖の底に藻屑と消え果てたる春雨艦乗組勇将勇士の果敢なき骸を殆めとして、武器雑器具の末迄も悉く志州名物の蜷の繊弱き手に引揚げられしは既に報ぜる所なるが、同地方にては古より溺死体を手厚く取扱へば豊漁ある由の云ひ伝へさへあるに、殊に今度の遭難者は名誉ある帝国海軍の将士なる事とて、五十余名の手弱女が殆んど昼夜の別ちもなく食事も碌にせず、休息も碌にせず、真に身命を擲ちての活動振りは目覚しくも亦嬉しかりき、特に彼の児玉艦長の屍体を発見せし折などは、尚多少の温味ありとかにて、三名の蜷は交る ― 艦長の果敢なき骸を抱きて我が身の体温もて頻りと温め、実に溢れ出づる赤誠をもて万一の蘇生もと希ひしなどは後の世迄も語り伝ふべき忘れ難き美しき誠にこそありけれ（後略）

地元で作成された『郷土教育資料 春雨艦遭難救護録』（志摩郡弘道尋常高等小学校編。三重県史編さん室でコピー架蔵）によれば、艦長の蘇生を願って自らの体で温めた海女は4名だというのが、溺死体を引き揚げる作業に男子は従事しなかったのであろうか。同資料は12月1日に至るまでの搜索作業について、次のように記す。

此間常ニ潜水シテ掃海ニ尽力セシ蜷婦ハ、長岡安乗ノ両村ニテ三百五十余人ニシテ、一方両村ノ青年及漁夫ハ海中眼鏡ヲ使用シ、両者相待チテ奏功シタルモノナリ、然ルニ残ル三人ノ死体容易ニ発見セラレザルニヨリ一時蜷婦ノ潜水作業ヲ中止シ、十二月二日以後両村ヨリ各十艘ノ漁船ヲ出シ専ラ海中眼鏡ヲ利用シテ搜索セシム

つまり、男たちは船上から水中眼鏡で海中を覗き、海底に潜り搜索するのは女性の海女たちだったのである。両村で350余人の海女とは、ほとんど総出の作業であつたろう。『伊勢新聞』が、海底からの死体引き揚げ作業について専ら女性海女の活動を取り上げたのは、決して読者向けの興味本位な観点からのことではなかった。

長岡村では「古来村民ノ難破船救助ニ於ケル決死的美談亦少カラズ、青年団ニ於テハ是等作業ノ中ニ規律統制ノ訓練モ自ラ行ハレ」とあるが、大正2(1913)年11月22日付の記事「志摩巡礼」（十九）では、神島でも青年団の誇りは難破船の救助であるとしている。この場合の青年団とは海女である女性を含むことが多く、海女漁村における難破船救助の伝統を感じさせる。

『伊勢新聞』には春雨艦遭難事件以外にも、北牟婁郡九鬼浦の海岸で行方不明になった男児を、当初は地元青年団が搜索したが果たせず、出稼ぎに来ていた海女の「大カツギ」（達人）らに搜索を依頼したとの記事（T3/8/4）や、漁船転覆時の死体搜索（T3/11/8、T11/8/23）に海女が出動している記事を見いだせる。また大正13年7月6日には、波切村で水泳中に溺れかけた少女を海女が発見して救助し、一命を取り留めたことが報じられている。

## 二、伝えられる海女習俗

### 1、「海女」の用語

「海女」と書いて「あま」と読ませるようになるのは近代以降のことであり、江戸時代の史料には男女を区別せず「海士」と記されることが多い（読みは「あま」である）。女性であることを特定する際には「蜃女」の文字が用いられる（稀に「女海士」という表現も見られる）。

『伊勢新聞』で見る限り、「海女」の語が最初に登場するのは明治 35(1902)年 9 月の朝鮮への出稼ぎを報じる記事であるが、ルビは「かいじょ」とある。それ以前は「海士」のほか「蜃女」、「蜃婦」、「潜婦」、「海婦」（あま）などと表記される。明治 39 年 1 月 18 日に荒布とアワビの大漁を伝える記事で「あま」のルビを伴った「海女」の語が初めて登場する。以後も「蜃女」「蜃婦」の表記は大正末年まで残るが、次第に「海女」が一般的になり、昭和期以降には「蜃」の字はほぼ見られない。これは観光パンフレットや絵葉書などでも同様に認められる現象であるが、単なる漁業者から観光客らの衆目を集める存在に転換していくと共に、分かりやすい漢字が用いられるようになるのであろう。

### 2、志摩の家制度と海女

明治末年頃から、漁況や事件のなかで海女が記事に出るだけでなく、海女の習俗についての特集コラムが何度かにわたって連載されるようになる。明治 42 年 2 月 24 日から 27 日に掛けて 4 回にわたり連載された「志摩の奇習娘の鮑捕」（2 回目以降はなぜか見出しが誤って「伊勢の奇習娘の鮑捕」となっている）を皮切りに、翌年 11 月 14 日から 16 日まで 3 回連載の「志摩の高齢者 研究すべき蜃」、大正 2（1913）年 4 月 14 日から 17 日にかけて 3 回連載の「海の女」などである。大正 2 年 12 月前後に 30 回以上連載された「志摩巡礼」でも、海女について何度か言及する記述がある。これらは共通する内容を含み、志摩海女を説明する際に広く用いられる決まり文句も認められる。あるいは同一の記者によるものかもしれない。当時の津を拠点とした新聞記者の、志摩海女についての認識を象徴的に示すものと言えよう。以下、これらの記事に語られた志摩海女の習俗や生業について見ていきたい。

多くの記事に共通して強調されるのは、志摩では女子が重宝されることで、妻が妊娠すると女子が産まれることを神々に祈ると言う。この地方では海女は女子の神聖なる労働と解され、家の貧富や職業に関係なく、病身者でもなければ女子は皆一旦は必ず海女になり、「之をせぬものは恥辱」で「蜃を為し得ぬものは決して村に住む事ができぬ程の風習となつて居る」ほどであった（M43/11/14）。

志摩出生の女子だけでは需要を充たさず、5、6 歳までの女兒を 4、5 円の金銭により伊賀・伊勢地方から養女に迎え、海女に仕立て上げることも多い。中には一家で 5、7 人の幼女を貰い受けた者もある。「後家や婆」でも女の子を 12、3 歳まで育てればサザエを採って飯を食えるようになり、更に 2、3 年で養育料が賄えるとする。

志摩では概して女性の方が長生きで、他地方から養女を迎えることもあり、女子の方が人口が多い。大正 2 年 12 月 11 日の「志摩巡礼」（三十三）によれば、当時名切村の人口

は男子 2300 人に対して女子は 3200 人も居ると言う。それゆえに女子は海女の腕を上げ、出稼ぎをしてでも金銭を貯めねば夫を迎えることができない。海女の稼ぎが一家の家計に占める率も高く、「男一人を養はぬ者は女の恥」(M42/2/27)「亭主一人をば養ひ得ぬ女は女で無い」(M43/11/16)とし、また夫は妻よりも 2、3 歳若いことが普通であり、夫の方が年長であると女性は仲間から不甲斐ないと言われる(M43/11/16)。一方で男子の多くは怠惰で、大正 2 年 4 月 17 日「海の女」(三)では、「男旱の女護の島」などと面白おかしく書き立ててさえている。

海女として生きた志摩の女性に高齢者が多いことは、『伊勢新聞』の記者も大いに興味を惹かれたようだ。明治 43 年 11 月 14 日に始まる連載「志摩と高齢者」では、皇太子来県を期に行った調査で、郡毎の 80 歳以上の人口比(百分率)は、度会郡 0.47、山田市 0.44、三重郡 0.42、四日市 0.26、飯南郡 0.26 という数字に対し志摩郡では 0.78 と圧倒的に高い。そして男女別に見れば女が男より著しく多いという数値が示された。記者も、危険で残酷でさえある生業を営む海女が長命なのは不可思議として、その習俗を検討しているのであるが、結論は示されず「研究する価値があるかと思ふ」と締め括るのみである。

海女の稼ぎ高についての記載をまとめると、月に「十二三円から多いのは三十円位」(M42/2/25)、「十円を最下とし二十四五円」(T2/4/14)、「十四五円、最優等者で七八十円位」(T10/8/4、1 日では「一円四五十銭、少なくとも七八十銭」(T2/12/18) などとなっている。出稼ぎの収益は、春から秋にかけて朝鮮半島に遠征した場合「一期間に百円位」(M42/2/25)、「大抵百円、少きも五六十円」、漁獲物の価格が高騰した大正 12 年には、5 月から 9 月までの 5 か月間で「少きは二百円、多きは六百元」にもなるとする(T12/6/9)。同月 21 日にも、「生活費を控除して何れも多きは六百元位づゝを儲けて故郷へ持ち帰る」との記述を見る。

海女が得る収益は家計の大部分を占め、一例として一家の年間生活費が 300 円とすれば、そのうち 200 円は海女の手によるもので、残りが田畑及び男子の得る収入だとする記事もある(M43/11/15)。総じて「志摩半島海産物の漁獲高七十万円の大部分は皆此蜚婦の手によつて得られておる」とまで記される(M43/11/16)。一方で高収入をあげても着飾らず、「白湯巻一枚」で過ごす質素な風を褒め称えている。

女子が 7、8 歳になると遊び半分で海に潜ることを始め、16、7 歳の頃には一人前の海女となる。それから 10 年ほどが働き盛りだが、50 歳まで潜る海女も居る。彼女らの結婚は 15 歳から 17 歳くらいで、寝屋の制度に基づく自由恋愛による結婚が一般的である。明治 43 年 11 月 16 日付「志摩と高齢者(三)」には寝屋の制度が詳しく述べられるが、ここで結ばれた縁は父母でも嘴を挟むことが出来ないと強調し、親たちも年頃の娘には寝屋行きを奨励することなどを記す。

結婚しても持参品は浮桶と白湯巻程度で、里帰りでも数時間働けば衣服代は出るとし、実家との結び付きを強調する。産前産後の海女漁は民俗調査等で注目されるが、産後も 2 か月ほどで復帰する、としている。

彼女らの多くは明治 20 年頃まで文盲だったが、明治末には尋常小学校 4 年までは行くようになっていた。楽しみとえば年に 1 度の盆祭りの踊りと年 1、2 回の鎮守祭の村芝居見物くらいで、あとはひたすら働く一生であると言う。

### 3、装備と操業形態

海女として出漁するのは、アワビ漁の時期だけではない。海藻類や冬季のナマコも彼女らの漁獲対象のため、「雪降頻る冬の日」も「結氷中」も、「雨の日」も出漁する。「雪降る日にも」というのは頻出する表現であり、外海は寒中でも海水の温度が温かいとはするものの（M42/2/27）、過酷な労働状況にあることを指摘している。風が凜々波静かな日は外洋に出てアワビやサザエ、またテングサ、アラメ、ワカメ、ヒジキ、フノリなどを採り、風が強く波立つ日は内湾で真珠貝、ナマコを捕獲する。

出漁時間は朝食を済ませて日の出頃だが、アワビ漁の時期は未明頃には出るともする。海女の出で立ちは「潮水に可成荒た髪毛を磯まげに束ね、魔除け縫いした手拭いを絞って、薄い胴着を纏ひ、水中眼鏡を懸け」、というものであった。持ち物は「必らず弁当と、漁獲物を入れるべき機桶と称ふる径も深さも共に一尺五寸位の桶、其他磯目鏡とて、水中を明かに見る事の出来るもの、白木綿の腰巻き、同じ手拭、鮑起し又は布刈鎌とを携帯する」（M43/11/15）とある。

海女の出漁には、岸辺から自力で海に入る「徒人」（カチド）と舟を用いる「舟人」（フナド）があり、舟人のなかにも男女1組で海底から浮き上がる際に舟上から相方の男が引き揚げる、いわゆる「トトカカ舟」の形態と、1人の船頭（トマエ）の舟に10人近くの海女が乗り込み、漁場に赴く「ノリアイ」とがある。

『伊勢新聞』の記事では、特に操業形態を説明する必要のない「徒人」については若い海女の修行中の記載に現れる程度で、特徴のある習俗としては、主に「舟人」が取り上げられている。「ノリアイ」形態については、「気の合ふた同士が五七人又は十人位一団となつて小舟に乗つて各目的の方面へ出動」するとし（M43/11/15）、「小舟に乗て沖合に出で、男子が船の上で梶を取て居る間に奇妙な口笛を吹いてツブリ海底に入ると」（M42/2/25）とあるのも、同様の形態であろう。

「トトカカ舟」の漁については、大正2年4月15日付「海の女」（二）に詳しく説明される。当時海女が身に纏うのは湯巻きだけだったが、それも浮世絵などに描かれる赤いものではなく、白に限っていた。「白湯巻一枚」で暮らし、働くという表現も海女についての記事に頻出する。この湯巻が白に限るのは、海水のなかでは赤よりも白色が目立つからであり、船上の水夫が白い湯巻きを目当てに海女の位置を確認するのである。水夫は海女の息の加減を図りつつ「海底に長い竹竿を投げ与え、蟹婦は此竿を力に海面へ浮ぶ」という。海女の生命を左右する水夫は海女と呼吸を合わせることが必須であり、多くは夫が、未婚の場合は男兄弟や父が勤めたことは周知の通りである。

さて、縄で引き揚げるのではなく長い竹竿（引き竿）を海面に下ろし、海中の海女がこれに縋り浮上するという様子は、明治44年12月5日の春雨艦難破一件の記事でも見られ、また明治初年に作製された『三重県水産図解』に描かれる海女漁の図と合致する（一部の浦村では近年まで行われていたという。海の博物館編『目で見る鳥羽・志摩の海女』、2009年）。ただし、『三重県水産図解』の図では、船上から縄を手繰っている男の姿も描かれ、また寛政11(1799)年に成立する『日本山海名産図会』にも、船上の男が縄を操っている図が見える。海女の体に縛り付けた縄を船上から引き揚げる形態も、間違いなく江戸時代に遡るのだが、これらは素手で縄を手繰り上げており、道具は用いていない。明治43年11

月 15 日付「志摩と高齢者」(二) では、ノリアイの形態についての説明の後、次のような記載がある。

(前略) 尤も村落によつて多少趣は異つて居るが、近頃は蟹女か海に沈むには八九百目位の重さの鉄丸を抱えて飛込む、之れは体の重みとするので畢竟海底に一秒刻でも早く達する法である。其時間は大抵二三十分、深さは大凡五六尋位の処である。又上る時には体に括り付けておる縄を舟から万力で引き上げる(後略)

3 kg ほどの鉄丸(現在ではオモリ、ブンドウなどと称され、10 kg ほどもある)を錘として海中に沈み、浮上する際は船上で待つ男水夫が、海女の身体を繋いだ縄を「万力」(綱を巻き上げるロクロのことを万力と呼ぶ。ここでは磯車のことを指すか)で引き揚げるといふ。「近頃」のこととしている記述を信ずれば、錘を用いてより深い所へ早く潜り、その分だけ磯車を用いて素早く縄を引き揚げるといった操作は、明治末年頃に始まったということであろうか。

海女が潜る深さは、この記事のように 5、6 尋とするのが普通で、これだけ潜れば「一人前の海」と認められる。「達者なのになると七八尋から十尋の深き海底に沈んで作業をするのもある」(M42/2/25)とあるのはともかく、「十二三尋から二十四尋もあろう海底に潜る」(T10/8/4)というのは、俄には信じがたい。明治 37 年 9 月 16 日付けの記事で報じる伝説的なオカズキ(海女の達人)・布施田村の小まさでも、「深さ十尋乃至十五六尋」としている。また 1 回の潜水時間も「二三十分」が常とは考えがたく、「四五十秒」(T2/4/15)という方が実態に近いと思われる。

1 時間に数十回の潜水を繰り返し、4、5 貫目ほどのアワビが受桶に溜まると、海女は一旦船にあがり、船中に備えてある「微温湯」を肩から浴びて冷え切った身体を温め、この用意がない船では急ぎ海岸へ漕ぎ寄せて海女を上陸させ、海女小屋に入って焚き火で暖を取らせる、という(T2/4/15)。弁当の持参や「微温湯」の用意は現在では見られぬもので、作業時間が長いためのことであろう。

### 三、海女の観光資源化

#### 1、御木本幸吉の真珠養殖と海女

古来より海女の漁獲物として、稀に天然真珠を見出すことがあるアコヤガイも含まれていた。だが、御木本幸吉が志摩の地で真珠養殖を大規模に開始すると、海女と真珠との関わりも変化する。御木本は 1890(明治 23)年、神明浦と相島で真珠養殖の実験を開始し、3 年後に半円真珠を得ることに成功、以後事業を拡大していく。そしてこの御木本の養殖場では、稚貝の採取のために海女が雇われた。

アコヤガイの天敵とも言えるのが赤潮で、これが発生すると貝が全滅するほどの被害が生じる。明治 42 年(1909)年には五ヶ所湾にも真珠養殖場が造られていたが(20 年間の漁業権を 1 万 5 千円で購入したと記される)、2 年後の明治 44 年 1 月に赤潮が発生し、ウナギ、タイなどの魚介類に続いて 2 月にはアコヤガイにも被害が及び、惨憺たる状況を呈した。当時、常雇いの海女 30 余名が居たが、御木本は真珠貝を守るために臨時の海女 50 余名をも雇い、海底から取り上げて移植したという。



3月13日の報道によれば、この養殖場は123万坪もの広さを誇り（海岸線は15海里）、加工真珠143万個、母貝350万個を放飼していた。普段の海女の仕事についても報じられており、真珠貝を求めて50秒位の潜水を30分ほど繰り返すと一旦海岸に戻り、数時間焼き火で体を温め休憩の後、再度潜る。1日に3度の作業で総時間は1時間半だ、としている。

彼女らは、真珠貝を採る以外に、真珠貝を食するタコの捕獲にも従事し、明治41年には年間で3500尾ものタコを獲たと言う。賃金は1日30銭から4、50銭で、これは先に見たような通常の海女漁で得られる額に比べれば半分以下である。だが、安全で季節に関係なく安定しており、多くの者が雇われた片田村では、御木本は神の如く敬われている、としている。

真珠養殖は、志摩で御木本のみが独占したのではなかった。大正2年8月13日の記事によれば、志摩郡神明村の山本常右衛門が、対馬列島の上縣郡豊崎と琴で真珠養殖場を大規模に開設している。視察段階で海女を潜らせ真珠貝を確認したとあり、当然海女を雇用して経営したことであろう。だが志摩海女を連れていったのか、対馬の海女を雇ったのかは残念ながら分からない。

## 2、見せ物としての海女

さて、御木本が雇った海女たちは、真珠養殖作業に従事するだけでなく、観光客を迎えるという新たな役割が付与されていく。

新聞記事で見る限り、その発端は明治32（1899）年に曾根農相（実際には曾禰荒助農商務大臣）を神明浦の養殖場に迎えた時である。御木本は海女（紙面では「海士」と表記）を雇い真珠貝を採って来させると農相は「ホト――満悦の体にて源氏の君の須磨の磯辺の風流に擬へんとにや」などと喜び、海女一同を招いて一緒に写真を撮り、家への土産にしたという。

海女が来訪者を喜ばせるとの認識が発展したのであろうか、明治44年5月には明治天皇后（昭憲皇太后）の来訪を受けた時に、御木本は海女を大規模に準備して接待を図った。御木本は、明治天皇に対して、世界中の女性の首を真珠でしめて見せると豪語したエピソードが知られるが、皇室関係者と接触することを大変重視した。外国要人との交流も含め、真珠販売促進上の戦略でもあっただろう。

皇后は両宮参拝の後、5月21日に二見を訪れるが、ここで御木本は「最も熟練したる、酷寒に於ても尚ほ一時間以上水中の寒冷に堪へ得べき者」で「十七八歳以上廿七八歳迄の者」を40余名選抜し、5隻の船に10人ずつ分乗させ、海中に潜っては真珠貝を採って来させた。それらを皇后が休憩しているところへ運び、養殖場支配人・久米楠太郎、東京工場支配人斎藤真吉の2人が貝殻を開ける。真珠を見いだせなかった貝が十数個あったものの、残りは「悉く金色銀色の漫然たる光沢を有する天然真珠」が出てきて、そのまま献上したところ、極めて満足の様子だったとする。

ところで二見の地は、夫婦岩をバックに海女の姿を描いた三代目歌川豊国や国芳らの浮世絵でも知られ、江戸時代の画師や文人らに、海女と二見浦は密に結び付いてイメージされている。だが、二見浦は志摩国ではなく伊勢国の内であり、史料上も近代以降の聞き取

り記録等においても、この地での海女漁は確認されていない（ただし、二見浦夫婦岩の前で海女が漁を営む絵葉書は存在する。この点は別途検討したい）。また、真珠貝が大量に採れる地でも、養殖している訳でもない。なぜここで海女による真珠採取が行えたのか。

御木本は皇后を迎える数日前から二見浦の名旅館・二見館に詰め切り、多くの人夫を使い六角形の暖小屋（海女小屋）2棟を造らせ、潜水前後の暖を取る施設とした。そして15万個の天然真珠貝から、美しい真珠を含んでいると思われるものを選び、夫婦岩の東方5、6町の海上に沈めておいた。こうした明らかな「捏造」により、皇后を喜ばせることに成功したのである。

もう1点注目されるのは、この時の海女の装いである。明治20年代後半以降に朝鮮半島へ出漁するようになった時に、外国への体面上からそれまで半裸体であった海女が上半身にも衣服を纏うように指導されたと言われるが、少なくとも志摩では、明治末年頃でも依然として「白湯巻」一枚で漁をするのが普通であった。だが皇后の前では「作業中不敬等のことなき様作業服には白襦衣、白股引に白き湯巻を纏はせ」とあり、全身白衣を着て作業に従事していることが分かる。なお、御木本養殖場でも「白湯巻一枚」ではなかったようだ。先に見た赤潮発生状況を知らせる記事のなかで、「白メリヤスを着し白湯巻を纏ひたる蜃婦」、「（休憩中に）作業用の湯巻及シャツは之を脱捨て」といった記述がある。

さて、御木本は明らかにこの成功に味を占めた。翌6月23日付けの記事には、来月に行われる鳥羽線開通式の余興として、御木本養殖場の海女の作業実演が行われること、そして「其服装は総て皇后陛下台覧の時の如しとぞ」とある。さらにその翌々日には次のような記事がある。

●蜃婦作業場新設計画 従来鳥羽を訪問する遊客の目的は日和山の眺望と菅島の鮑取作業の遊覧とに在りて、鳥羽線開通の上は一層此等遊客の頻繁を来すべきを以て、御木本幸吉氏は将来鳥羽港に於て鮑取作業を縦覧せしむる為め今回停車場附近なる縁期松角より戸島に至る海面一帯を借受け、之を蜃婦の作業場となすべき計画となるが、鰯其の他浮遊魚の捕獲は差支無きも、海鼠貝類海草類の採捕は作業に害あるを以て専用漁業権者たる鳥羽漁業組合に対し若干の代償を為す筈なりと

鳥羽湾の一角を借り受け、海女の作業場とする計画であるが、アワビや真珠など魚介を採取することが「作業」ではなく、それを観光客に「縦覧」させることが目的なのである。「海鼠貝類海草類の採捕」に障害となるため専用漁業権者たる鳥羽漁業組合に代償をなす、とあるが、漁業権の買い取りであれば作業場の海女がこれらを採れば良い。冒頭で鳥羽への観光客の目的は「日和山の眺望と菅島の鮑取作業の遊覧とに在り」との記述があり、既に単なる漁業従事者としてではない海女の経済価値が注目されていたようだが、ここで御木本により、海女の作業を見物させる常設の施設が造られたのである。7月2日付けの記事では、鳥羽組合へ50円、小浜組合へ150円を弁償することで契約を整えたという。

大正12(1923)年には、当時婚約中（関東大震災の影響で婚儀延期）で、後に昭和天皇皇后となる良子女王が伊勢・志摩を訪れた。伊勢の御木曳を見学後、二見浦の風景を見、それから鳥羽に着く。5月6日付けの新聞記事では、「望遠鏡で海女の作業御覧」との見出しで、樋の山の休憩所から35倍の望遠鏡で「三里を隔つる答志島の海女の作業を手にする如く見ゆるを御感興あらせられ、柴田本県知事を顧みて色々御下問あり」としている。

答志島の海女の作業が偶然に見られたとは考えにくい。間違いなく、良子女王が望遠鏡

で覗くのに合わせて行われていたものであったはずだ。

実は江戸時代にも、朝廷の女官・長橋局がお忍びで二見浦を遊覧した際、海女にアワビを採らせて慰みとしたとの記録がある。先の明治天皇后の事例と合わせ、皇室関係者の女性に海女の作業を見物させるというのは、何か特有の意味でもあるのであろうか。

## むすびに代えて

本稿では触れられなかったが、大正末年以降、全国各地や海外で開催された博覧会において、「海女館」という施設が人気を集めた。大きな水槽に海女が潜って貝などを採ってくる様子を見物させるのである。海外で行われた大正 14(1925)年の大連勸業博覧会（山路勝彦「満州を見せる博覧会」(『社会学部紀要』101、関西学院大学、2006 年)を始めとして、国内外の博覧会における「海女館」は、管見の限りでも 25 例を確認できる。そして鳥羽、二見の水族館や三重県内の各地でも海女ショーが行われ、客の呼び物となった。

だが、見せ物としての海女は、確実に明治期に遡る。前述の御木本が鳥羽湾で開設したもののほか、都市部での見せ物小屋のような施設でも行われていたようだ。明治 43 年 11 月 16 日付「志摩と高齢者」(三)のなかで、海女の出稼ぎ習俗に触れた後、「又東京浅草、大阪千日前、京都の新京極などで海女の見せ物をやつておるものは皆此志摩の海女である」との記載がある。博覧会における「海女館」の盛行は、その前史に見世物小屋での海女ショーがあったようだ。

海女からの聞き取り記録などでも、観光地や旅館などにおいて、「スイリ」と呼ばれる海女ショーの出稼ぎを行ったとの話があり、下着を付けず磯着だけで潜り、また裾がはだけるのが売り物であったなどとの話も伝わる。都市歓楽街の海女見せ物も含め、これらはエロチックなショーとして人気を集めたようだ。

だが、皇室女性が再三海女を見物している点や、御木本が手掛けた白磯着を纏う海女の作業実演にも鑑み、見せ物としての海女をエロチシズムからのみ語るのは間違いであると考え。近代以降に交通の発達と共に旅行が一般化し、都会周辺では見慣れぬ漁村習俗の存在が広まり注目を集めたことを背景とするが、海に対する人びとの見方も前近代とは大きく変わった。それまでの海は、一般の人びとにとってまずは漁民が生業を営む場であり、そして景勝地として眺め、船で遊覧する対象であった。海で泳ぎ、潜ることは専ら海女が行うことであった訳だが、明治末年以降に海水浴場の発展により、一般の人間の身体と海とが直接に結び付くようになった。こうしたなかで、伝統的に潜ることで生業を営む海女への関心が高まったのではあるまいか。

各地の海女館に象徴される海女への注目、三重県における鉄道会社や旅館組合、行政による海女の観光資源としての活用は、昭和期に大きく展開するが、これは次稿に譲ることとしたい。

(つかもと あきら 三重大学人文学部)

年次	月	日	見出し	内容
明治14(1881)	8	17	(雑報)	客月来志摩国英虞郡波切村以西南張村迄諸村で石花菜は古今未曾有、人民は欣喜。
明治16(1883)	2	16	権利の伸暢	昨年7月に和具村11名が布施田村の海面に侵入して荒布を刈り取り、布施田村は窃盗として山田輕罪裁判所公訴。和具村は大に驚き、東京修進社に弁護を依頼。旧藩の頃より訴訟、明治8年に当時の区長が説諭、此辺の習慣で海面の境界は海底岩礁の断続を以てするとし、布施田非分に。その後も訴訟・逮捕あり。先頃鳥羽警察署の巡查が探偵、予審で和具側の窃盗を認定。
明治16(1883)	2	17	権利の伸暢(続)	予審終結。和具村民驚き、東京修進社に相談。裁判所も取調の不完備を悟り、和具村は無罪に。
明治16(1883)	7	11	潜水器試用	山田岩淵町箕曲龜哉は英虞郡船越村で鮑捕獲潜水器械の試用を地先惣代人連名で農商務省に出願、一年間の許可を得る。
明治16(1883)	8	1	英虞郡況	英虞郡は海洋に面し土地偏僻、習俗頑固、夏時ハ男女裸体を常、漁獲額数十万円、概して富庶。食物は甘藷を最とし米穀少し、郵便局2ヶ所。学費を呑み進歩を見ず。人情ハ質朴に過ぎ情に迂たり。
明治16(1883)	11	30	潜水器の鮑漁	志摩国国府甲賀両村で本年5月中潜水器で鮑捕獲・売上金高は、国府村15日間で1050貫目、代金272円余、甲賀村5日間で26貫余、58円余。
明治17(1884)	1	5	潜水器	英虞郡片田村で潜水器使用鮑漁は従前一決せざところ、村民の重立ちたる者は海婦(あま)の取り得ぬ鮑の暗礁にあるを惜しみ、潜水器使用試探。6日間で557貫目代金833円余。海婦の捕獲の数十倍。村内挙げて奮発。千鮑は本県輸産物の重なるもの。
明治17(1884)	1	18	不景氣	布施田、和具、越賀、御座の4ヶ村は当夏以来海藻収穫量が多く、壮年から浦少女まで日々働き利を得る。家普請や置換、井戸穿、衣服新調等。片田、船越、波切、名田等諸村は漁利なく大困却。
明治17(1884)	5	11	感心な嬌婦	ナミは英虞郡片田村の産、10年前に多く子供のある波切村岡与平次の後妻に。夫の死後も実子継子の区別なく愛情を持って立派に育てた立派な嬌婦。
明治18(1885)	7	15	テングサ	和具村近海でテングサが例年より多く生ぜしが風波の模様で皆同浜の向ひ筋大島(和具村の地)に流れ着。過日の暴風雨で残らず越賀村海浜へ吹流され、同村の者は大に喜ぶ。
明治18(1885)	7	29	寒天元草	方今買入氣配で入荷主は剛氣、直頃は志州産上等10貫目に付き2円80銭、紀州は2円60銭以下の商勢。不日志州浦で入れを見込、相場は前直より高値の模様あらざるべしと大阪の新聞に。
明治19(1886)	12	1	有効の潜水器	ノルマントン号沈没場所を黒田参事官一行探求。片田村濱口清兵衛所有潜水器は海底37尋まで沈入。
明治21(1888)	6	28	石花菜移植	志州紀州の石花菜が年々陸地に向ひ、深水部分に減滅す。波打際まで移り、全く同草を見ざる部分を生ず。古老の物語に、往年は多く産せざりし伊豆が却って産額を増す。潮流模様か海底滋養分欠乏が原因か。早急に対処が必要。水産学会芸委員山本由氏が移植の好結果を農商工報に載す。転載(石花菜は岩石に蕃殖、移植は容易。豆州では200年前に行う。豆州では方今採種額は年々7万円に上る)。
明治24(1891)	6	28	石花菜の採取	南牟婁郡荒坂村大字二本島で石花菜の採取の最中、当年は志州から海士20名余りを雇い入れ従事。採取高随分夥多。
明治24(1891)	7	23	答志英虞通信	本年不漁至極不漁だったが過日小鯖大漁で糊口を凌ぐ。海藻類も昨年来磯荒れで皆無採取なりしが、本年は旧に復し潮草鬼草採取が非常に多し。両三年天草は水産学上の一問題、悪水潮流説、十七八年か二十三年目に二三年の間歳ありとの説、天草発生の磯辺に小虫生じ萌芽を喰い絶す等諸説。本年は該草発生の徴証あり、人民非常に喜び居る。
明治24(1891)	8	15	鮭漁及び高飛水練の御覧	皇太子殿下は度会郡四郷村の有志惣代が願ひ出た鮭漁の様子と、練達の漁夫六名が赤色の肌着を着し建物上から海水に飛び込む様子を御覧になった。
明治25(1892)	8	23	海士の溺死	南牟婁郡北輪内村盛松浦は石花菜の繁殖宜しいが土地に海士(あま)がなく、毎年志州御座地方より出稼の海士を雇入れる。海士の1人が深さ3、4間の処に沈み海底の岩石に抱き附きしまゝ溺死。昨年中も同様の水死あり、7、8年前三河海士も水死。無風で突然船転覆もあり、出稼海士等是不詳の漁場と為し約束を断り志州へ帰りし趣。漁業者は明年を心配す。
明治25(1892)	10	12	英虞郡地方の近況	米の豊作、鮭漁獲で好景氣。何の村も芝居の話。殊に波切村以北沿海各村落は潮草収穫多、女子の働きでも数十金を得る程なれば呉服小間物の売高多し。
明治26(1893)	7	7	志摩便り	昨年来世人に率先して北海道で採藻従事の御座村海士は本年も60余名が去る1日利尻島へ向け出発、其他2、3の有志も近日同地へ渡航す。利尻島は石花菜昆布が多く、海膽の夥しきは海士1人20分間位で300余の獲物あるほど。
明治26(1893)	7	14	鶏冠草採取の進歩	海草中清輸出品最高値(1貫目1円25円位)の鶏冠草は紅草と称し、五島及び九州沿海で採取し長崎より輸出、横浜で取り扱うもの甚だ稀れ、大島八丈等では海岸に打擲るものを採取する位。近頃潜水器を用い盛んに採取、産額を増加するならん。
明治26(1893)	7	21	北巡録(第三報続)	礼文島で石花菜採取に潜婦30余名を伴い数ヶ月前より来る越賀村井上太市氏に出会う。又、片田村橋本三郎右衛門氏が潜婦20余名と上陸。東京銀座安売隊長、宗谷岬鯨取業開墾百姓岩谷松平氏の手引き。利尻島では潜婦が石花菜を尽くさん恐れ採取を拒む者ありと聞く。
明治26(1893)	7	22	潜水者に電話機を試用せしむる新工夫	外国新聞によると電話機が潜水業者まで普及、潜水者の兜に電話機をつけ、海底より報道し、陸上より機械を受け取る時に少し頭を動かせば用を弁ずるを得ると云う。
明治26(1893)	9	3	志摩海産の遺利	志州近海で一円にイグス一名浮濁姑と称する海藻を生じるも本年迄誰も知らざりしに、鳥羽町の水産家御木本幸吉、これを盛んに売り出し1貫目に2銭5厘から次第に上騰し11銭5厘の相場に。寒天製造原料。最初に買い取る志摩の中村某氏は1ヶ月に400円の利益を得たりと。
明治27(1894)	6	24	英虞郡和具村の近報	旧暦正月頃より北海道利尻島へ出稼の男女46人より鮮大漁との報知あり。和具村松井弥八氏雇の蟹婦57名男子16名は、出稼先の九州が採藻見込みなきより、朝鮮竹島に入りたるよし。金玉均事件や東学党の乱あるを聞き、遭難あらざるかと家族は心配。
明治28(1895)	4	14	蟹女、朝鮮に出稼ぎす	志摩の蟹女10数名一団が渡航免状出願、今又15名一団、四団体渡航出願。国益のため賀すべし、果下蟹女が斯く奮発せしは嘉すべき。
明治30(1897)	7	29	荒布採取	波切村で荒布採取始まり、3日間で10万貫に及び、相場は1円に付き24、5貫目、収利夥多を推測。
明治32(1899)	4	14	漁業者渡韓	船越村山際藤吉外5名(男3女2)、片田村竹内トメ外20名(男3女17)、布施田村浦口浅吉外女1名、波切村城山サン外女21名が漁業のため朝鮮国へ渡航を出願、免状が下付けらる。

明治32(1899)	4	26	農相海士と撮影	去23日、曾根農相が神明浦の御木本幸吉氏の真珠貝養殖場を巡察。海士が真珠貝を採取せしめたるに満悦の体、源氏の君の須磨の風流に擬へんとにや、海士の姿を写しもて東の家土産にせばやと海士一同を招きて已も交り撮影。
明治34(1901)	4	14	韓国渡航	和具村山本喜平氏は多年朝鮮国海産事業に着目し、同志数名と三重県朝鮮海通漁組合を組織し、大阪海産商と契約を遂げ、過日来答志村及菅島村等にて蟹婦雇入中、已に30名ばかり契約整い、不日渡航に就く等。
明治34(1901)	5	17	東大淀近況	養蚕盛ん、其他産物に菅笠、布糊。鹿尾菜は北村伝三郎製造元、布糊原料は志州及度会の南島、紀州より北海道肥前五島朝鮮等より仰ぎ、本年新草の仕入より見れば昨年より2、3割安の見込み。
明治34(1901)	6	21	志摩郡甲賀村雑信(18日発)	甲賀村領海の彼の油瀬、兵庫瀬は鮎の産地で有名であるが、潜水機械を据付、1日平均24、5貫位を捕獲、相場は1貫目1円10銭内外で好況。当村の名産で寒天の原料烏足草は、本年は例年より至って少なく、漁業者は頗る愁色あり。
明治35(1902)	2	25	朝鮮国鬱陵島の海産物採取	片田村濱口清兵衛氏は鬱陵島で海産物採取従事、魯国干渉で苛税徴収ゆえ一時中止帰村、小笠原島等に往来、今回魯国は税額を減じ一般漁業者に便利を与るにより再び渡航し従事せんと準備中。4月頃までには村内の同志者数名と共に赴く等。
明治35(1902)	3	6	志摩海産同盟会	志摩郡で鮎、淡菜、石花菜等の潜婦を出す村方は漁期前後や漁況等により韓国、伊豆、奥羽、肥前、日向等漁業者と契約し月給や歩合での出稼ぎが年々百名を下らず。契約前甘言で誘出し低廉給料もあり、蟹婦の不幸地方の不利益。御座村で地方利益保持の目的で規約を設け志摩同盟会を實行。他村も加盟。志摩郡の出稼人は今後同会に加盟し態度の軌一を図るべしと。
明治35(1902)	8	29	沿海婦人の労力	前島地方の婦人は海藻採取が当期の職業であるが、最近4、5日間の荒布株取高は濱島村10万貫、御座村12万貫、越賀村7万貫、和具村8万貫、布施田村10万貫、片田村13万貫、船越村7万貫合計67万貫にて、仮に100貫目に対する下直30円でも総計20萬円の多額に上る。沿海婦人の労力も大。
明治35(1902)	9	25	波切通信 出稼ぎ人の帰国	志摩先島地方より朝鮮出稼中の海女(かいじょ)は、悪疫流行により一時引き揚げ、日々健康診断に繁忙を極め居れり。
明治35(1902)	9	25	波切通信 波切婦人会 波切婦人会	波切婦人会は燈火親しむ時期を迎え毎夜2時間づつ読書裁縫を自修せんとて仙遊寺の庫裡を借り受け既に開始したり。
明治37(1904)	4	27	蟹婦海底に大鮫を捕獲す	布施田村濱口安之助長女こまさ(25)は蟹婦に雷名を轟かす剛の者、此程自村の前浜『ワタリ』にて若布採取の折柄、海底遊泳の栄螺喰という10貫余の大鮫を発見し、其尾を掴み海面迄揚げ来り、舟主始め一同舌を巻かぬはなかりし、4人掛りで舟中へ引き入れ、隣家、親戚知己へ分与したりと云ふ。
明治37(1904)	6	22	蔚山近海の採鮎業	蔚山湾口へ釜山湾森野組納屋栞棟、漁船武隻、潜水婦20人。1人の漁獲平均貝附5貫目余。始業以來13日漁獲総高千貫目余、改良製灰鮎50円内外の相場。
明治37(1904)	9	16	豪胆なる蟹婦の平生	予て本誌掲載の布施田村濱口安之助長女小まさは、実性豪胆、下機などへ毎年出稼に行く數百人の蟹婦中でも立附く者なきオカズキ(磯の達人)で、自村前浜の鮎水揚げは毎日15、6貫乃至20貫目位の収穫、近き10日間178貫余代金84円余、嫁入先の基太郎の蝦蟇よりも一層の光明を放つ。採取の模様を聞くに深さ10尋乃至15、6尋の深海をくぐり、海底巖窟の穴内に身丈以上を潜み入り鮎を撃て外し、沢山外した時は両腋や腋下へ挟み揚ぐとの事。
明治39(1906)	1	18	志摩通信	昨年中の儲け口は沃度師と売薬屋で、荒布、鮎の大漁で海女(あま)の金儲は非常にして、1人毎3、400円の所得を見たものあり。
明治39(1906)	9	29	蟹婦の溺死	濱島村の森とも(34)は去24日、同村字カナガタシ海岸で潜りて鮎捕獲の際、兼て身体異常ありたるか溺死。
明治42(1909)	2	23	志摩の奇習娘の鮎捕(其一) 豊富なる海岸線	日本の海岸線に富むことは世界無比だが三重県は海岸線が160里で、魚介類は巨額。昨年末で鮎124万貫余、31万円余等。総金額385万円余り、実態はこの3倍か。志摩では漁村戸数2万戸、10万人の漁民、産出額は熊野の捕鯨を加えて一千万円の水揚げ高、水産県として誇るに足る。
明治42(1909)	2	24	伊勢の奇習娘の鮎捕(其二) 年が年中漁業が出来る	紀州志摩は熱帯潮流に接し、潮潮は寒帯と良性を具有。御木本養殖場母貝は志摩の特産。和布も。伊勢内湾は日本三大湾の一つで波浪穏、蛤島貝等、各種魚族の産卵場、年中漁業が可能。天麩羅の種子は伊勢。伊勢海老、穴子。鮎も伊勢が本場。田作。東京又は大阪に搬送。娘子の鮎捕り。本場は崎島海岸、蟹こそ志摩の特有物、肥前大村は男蟹、志摩は娘子や女房が雷雨も海底に潜り鮎や海藻を捕る。就中和具、布施田、神島、答志、相差、国崎、石鏡等が盛に女の働く処、朝鮮海に出て稼ぐもあり、濠洲の真珠捕りに出かけて成功してるものも少なくない。
明治42(1909)	2	25	伊勢の奇習娘の鮎捕(其三) 湯巻一枚で海に潜る	蟹人女軍は優勢な力で潜水機械と競争しても勝つ。朝鮮海方面へ出稼ぎは皆一期間に100円位の金を残して帰る。寒天草や妖度原料の荒布は米国辺でも発生するが、運転に數人男子を要する潜水機械では収支が償わない。海女は機械以上の働きが出来、外国人では遣り切れない湯巻一枚で寒天でも海中へ潜る。日本一の奇習。7、8歳から海女を仕込む。17、8歳の妙齡な時期には一簾の動手に。之を為ねば女子一人前に通らぬと。一人前の蟹入り女は5、6尋の底、達者は7、8尋から10尋まで。小舟で沖合に出、男子が船上で縄を取、奇妙な口笛を吹いて海底に入、鮎を片手に浮上。女1人で1ヶ月漁獲高は12、3円から30円。
明治42(1909)	2	27	伊勢の奇習娘の鮎捕(其四) 嫁入りの道具は浮桶	志摩では女子が重宝され、他から貰受て蟹に養成する。後家や婆でも女子を12、3歳に育て上げれば鮎の収入で飯を食える。もう2、3年経てば一人前の蟹入りと為る養育料が出てしまう。嫁入道具は浮桶と白湯巻で良い。里帰りでも数時間働けば衣物は出来る。男1人を養はぬ者は女の恥として居る。容貌は話にならぬ、内務省が視察時の復命書に男子は猿に似、婦人は稚女に近しとあり。就学児童も女子の方が多い。水温が暖かいため雪の日でも海に入り、鮎産出期は未明頃より働かせる。身なりは頓着なく、漁間秋期には珍な風俗に風呂敷包を頭に寄せ、7、8人づつ度会地方より桑名伊賀迄福刈に出稼ぐ。
明治42(1909)	4	1	渡航蟹婦の風俗取締	波切村地方では韓国に渡航して潜水漁業に従事するもの300余名、3か月で1人40円乃至100円の収入ある故、妙齡女子も有夫の婦人も出稼ぎ。長崎県他各府県の事業家に雇われ、各村に1、2名の紹介者を設け募集する。中には親権者の承諾を得ず、無理な誘拐もあり、渡航後は情夫を持つなどの弊害があり、紹介業者取締規則により募集者を取締り、本年旧3月渡航蟹婦は其筋へ届け出る趣なりと。

明治42(1909)	6	2	本邦蠶婦の起源と熨斗鮑の由来 蠶婦御前の系統	鮑取漁業は世界に比類なき特技。北米桑港付近のモンレー海岸で兩三年前に国崎村蠶婦が鮑を取上げ、珍しきことと紳士淑女の娯楽として、近來は營利的に盛んに行われる。欧州までも普及か。蠶婦の需用は今後増加し国富の一助となるか。蠶婦の起源は豊崎の海士潜水神社祭神。倭姫命に御饌調進を命じられたおベンが乾燥鮑を献上し、熨斗鮑の起源となる。御潜浜は禁漁区で、神事時に近郷八ヶ村の蠶婦が集まり六月朔日に旧藩役人出張して行。維新後は遠近より蠶婦参拝多し。国崎蠶婦は技能巧みで、他の者を凌ぐ。
明治43(1910)	4	24	韓海に活動する志摩の蠶婦	志摩蠶婦の多くは片田、和具、片田は人口3300余、女は蠶婦を本業とし其間に農業を為す。4月初旬より9月末頃まで鮑、寒天草、布糊採取に韓国へ出稼ぎ男女40人。本年も蠶婦32、男11が去22日渡韓。従業地は蔚山、釜山、元山他。長崎石本亀吉、淡路森野庄吉が事業主。一割を引き残りを船夫と折半。平均百5、60円の収入。出稼先で墮落し情夫を持ち帰国せぬ者あり。紹介業種取締強化。男子の北米南米出稼ぎもあり。和具は韓国出稼蠶婦40、船夫2人、慶尚道、江原道近海、3月初旬より8月まで。労銀は鮑1貫目に30銭、蠶婦収入は百3、4円から3、40円。1村合計で2千円以上。蠶婦の韓国出稼は27年頃より始まり、其後35年は主に寒天草を採取、失敗に帰し36年度よりは鮑採取を韓国に開始したる。
明治43(1910)	5	18	韓海漁業事情	韓国への通漁奨励移住漁村経営の県費補助一覧。韓国への移住漁村書上。主要漁業。漁物運送。水産種類。漁獲比較。韓国の一隻の平均收穫高は日本の半分に足らず、韓国沿岸に日本漁民を移住せしむるか進歩した漁業の技術を練習せしめば收穫高は大に増加すべし。
明治43(1910)	11	14	志摩と高齢者(一) 研究すべき蠶婦	東宮殿下行啓に付き県下各都市80歳以上高齢者数調べ。百分率は志摩が0.78で次が度会郡の0.47、山田市0.44、三重郡0.42、四日市0.26、飯南郡0.26などで、志摩は驚くほど高い。漁村の女、特に蠶婦が多い。冒険残酷過度の労働だが平常の生活状態はどうか。昔から詩歌に知られ、俊成、定家、万葉集、人丸らの歌。いずれも生活の苦しさ状態。伊勢の海を枕詞にするが、往昔は志摩も伊勢の一部であったためか。志摩では7、8歳になれば遊戯半分に潜水稽古、16、7歳で一人前の海女になる。
明治43(1910)	11	15	志摩と高齢者(二) 研究すべき蠶	海婦の年齢は16、7歳から26、7歳が働き盛り。50才までも。概して未婚時代を適当。收穫は両親の収入、家計の大部分。例えば一家で1年300円の生活費で200円は海婦(あま)の収入。養女が盛ん。25、6で相当な処へ嫁がせる。産後2か月で海婦に出る。明治20年頃までは文字では知らなかったが今は尋常四年までは行く。一生の楽しみは盆祭、鎮守祭の村芝居。2、3月頃か十月頃まで波静かな日は外洋で鮑、石花菜、荒布若布他、波立つ日は内湾で真珠貝、海扇等。并当と1尺5寸位の機桶、磯目鏡。白木綿の腰巻き、手拭、鮑起し、布刈鎌を携帯。気の合う同士で5、7人、10人が一団となり小舟で出勤。近頃は8、9百目の鉄丸を抱えて飛び込み、縄を船から万力で引き上げる。2、3分、5、6尋位。魚市場で仲買人の入札法で売る。村によっては口前役が帳面に記す。口銀を引き村費学校費等に支弁も。
明治43(1910)	11	16	志摩と高齢者(三) 研究すべき蠶	海女(あま)の結婚は15才から17才位で自由結婚が殆ど。寝屋で男女打交り夜業、宿泊、媒介交換。親達も寝屋行を奨励。夫は婦より2、3歳若い。夫が長は女性仲間から不甲斐ないと言われる。年老いと夫は若い妻を置く風習も。他より子女を貰い受け海女にする風。海女員数が増加し供給過剰のため、近年來朝鮮、北海道、シベリア、北米等へ出稼ぎに5、6百人から2、3百人行く。毎年2、3月頃資本家が30人50人と団体を為し、11月頃帰国。契約は1年限り。其先で自由結婚も。東京浅草、大阪千日前、京都新京極で海女の見せ物も志摩の海女。志摩半島海産物漁獲高70万円の大部分は皆蠶婦の手による。海女の生活が不規律千万、衛生上からも短命なるべき不思議な長命。
明治44(1911)	3	13	赤潮被害の惨状(一)	特派員三井生報 慘憺たる五ヶ所灣／赤潮依然減退せず／養殖真珠の大打撃 御木本真珠の状況。御木本氏は真珠介移植のため臨時雇の蠶婦收容場建築作業に忙殺。煤水色の五ヶ所灣。移植作業船の活動。数十隻の漁船は8、9人の蠶婦を乗せ、白メリヤスを着し白湯巻を纏う蠶婦が海底に潜り真珠介を取り上げる作業。1回に50秒間、30分間を越えず。海岸で炭火を起し休憩。1日3回1時間半。御木本氏は常雇海婦30余名の外に臨時海婦50余名を雇う。十数棟のバラック式海婦收容所を海岸各地に建築。海婦の多くは17、8才より24、5才、大部分は未婚者。盛に衣服胡服の批評、作業用の湯巻及びシャツは脱ぎ捨て他のものと取り換え、職業的衣類は海岸に広げて日光に曝されあり。
明治44(1911)	3	15	赤潮被害の惨状(三)	赤潮の主成分／真珠養殖の試験／海底は真暗 蠶婦は数尋の水底に潜り暗黒のため真珠を手探りで掴み当て、時に岩石に頭部を打ち付ける事もあり引揚作業は困難、今日まで健康貝の移転は僅か7万個に過ぎず、完結は5月中旬か。／五ヶ所灣養殖場／只では真珠は取れぬ
明治44(1911)	3	16	赤潮被害の惨状(四)	真珠は草魚の餌食 大草魚は1夜に30個以上を喰う。毎年夏季に草魚の大捕獲を為すに海婦を用いる。海底に潜り草魚を漁する妙を得たるも面白く、昨年は2500以上に達す。真珠養殖場の海婦の日当は1日30銭から4、50銭。多くは片田村より雇入。海婦らに養殖場から支払われる金額は1年5千円。片田村では御木本氏を神の如く敬う。16、7歳の女子を3ヶ年で契約、期限後結婚する者は奨励のため引き出物として紋付物二重ね贈る。海婦は近來ハチカラ娘となり洗粉、香水を用いる。／漁民の公徳／日本の真珠村／御木本氏の奇行／座右に尊徳翁夜話／蠶婦と労を共にす 常雇海婦30余名は工場内に生活、御木本氏は彼等の労苦を思い毎朝同じ物を食べ、寒中午前6時を期して工場前の海浜で数十分間海水浴を試み、海婦漁船を引卸すにも自ら赤裸々となり海中に飛入る。
明治44(1911)	5	23	天然真珠の献上 陛下御満足の御嘉納	陛下(皇后)が二見に御成りの際、真珠取り作業をご覧に。御木本場主は数日前より二見館に詰切、六角形の暖小屋を海岸に設らえ、蠶婦の潜水前後体温を暖む箇所に。海婦は健康で技術の高い者40余名を選別し、作業服には白襯衣、白股引に白湯巻を纏わせ、5隻の真珠採船に10人ずつ分乗、数日前に15万余の天然真珠介中美麗な真珠を掴み居るを放飼、夫婦岩東方5、6町海上に漁船を止め蠶婦が採取。真珠介を休憩所なる御前に進め、金色銀色の光沢を有する天然真珠を献上。御満足。
明治44(1911)	5	25	夫婦岩を御下問 御木本真珠王の光栄	二見浦で陛下は夫婦岩の高さ水の深さを下問。蠶婦の作業風俗等々下問。真珠作業船の獲たる真珠を御前に差出、香川太夫は御木本真珠王を招き整理を命じ、御木本は真珠介を真二つに割り、真珠玉を御覧に供す。陛下は殊の外御満足。御木本翁は感涙に咽ぶ。
明治44(1911)	6	23	蠶婦作業余興	来7月21日鳥羽線開通式余興に御木本真珠養殖場の蠶婦作業。服装は全て皇后台覧の時の如し。

明治44(1911)	6	25	蟹婦作業場新設計画	従来鳥羽訪問客の目的は日和山の眺望と菅島の鮑取作業の遊覧。鳥羽線開通の上は一層此等遊覧の頻繁を來すべく、御木本幸吉氏は将来鳥羽港で鮑取作業を縦覧せしむる為、停車場附近の緑期松角より戸島に至る海面を借り受け蟹婦の作業場となす計画。蟹その他浮遊魚の捕獲は差支無きも海貝貝類海藻類の採捕は作業に害。専用漁業権者の鳥羽漁業組合に若干の代償を為す等。
明治44(1911)	7	2	蟹婦作業場着手	旅客遊覧の便を図り、御木本氏計画の鳥羽の蟹婦作業場として、鳥羽漁業組合漁場緑期松より戸島まで、小濱組合の戸島より魚見家まで蟹婦潜入の件、毎年鳥羽組合へ50円、小浜漁業組合に150円づつを弁償する条件で協約整ひたれば、近日設備に着手すべしと。
明治44(1911)	7	12	志摩海藻採取沿岸漁村の富	志摩郡海岸は天草及掲布等の海藻豊富、天草は蟹婦採取も多大だが、東風強き海荒の際は海底より打ち上げらる海藻も多く、夏期は沿岸漁村は干並べ寒天原料として輸出。掲布は多額算出、海岸を黒く染出す。沃土の原料で英国地方へ輸出、産額は数百万円。男女共年中従事し採取期は荒布の山を為す。明治10年頃は磯焼で海藻蓄殖減退、当時山林盗伐ゆえ淡水注入の結果を確かめ、その後盗伐を戒め植林に注意したため漸次沿岸一帯に繁茂するに至れりといふ。
明治44(1911)	12	5	志州濱の女王三名の蟹婦が果敢なき館長の骸を抱く	管崎沖底に藻屑と消え果てた春雨艦乗組勇将勇士のなき骸、武器雑器具迄、蟹の手で引き揚げられし。同地方では古より溺死体を手厚く取り扱えば豊漁ある由の言い伝え。50余名の手弱女が昼夜別なく食事も休息も疎にせず、身命を擲ち活動。児玉艦長の屍体発見時は3名の蟹が代る々々体温で温める。志摩蟹は7、8歳頃より潮を潜ぎて螺、貝など拾ひ、16、7より4、50歳迄は鮑海布刈、唯菅校白布の腰巻服に磯眼鏡、磯桶白手拭鮑おこし。男子は妻や娘に養われ、船中にありて竹竿を海に入れ、妻や娘は竿を頼りに頭を出し、潮を吹き深呼吸、笛を吹くが如し。獲物は陸揚げて仲買人の手に売買、村役場で口銀と称え1割乃至1割半を徴収、村費・学校費等に支弁。
明治44(1911)	12	8	温き海士の心長岡、安乗、的矢の美風	水雷駆逐艦春雨艦沈没で出張の佐世保水雷駆逐艦長海軍大佐森越太郎氏は、的矢湾の長岡、安乗、的矢の海女(あま)達が屍体捜索の第一功労者として感謝。3村の海女(あま)は20歳前後より40歳位までの女。1村100余名から50名、寒中山の如く打寄せる怒濤を物とせせず甲斐々々しい働き。児玉艦長を肌で温めるなど不覚涙に袖を濡らす。村の人々挙つて殆ど海軍救助隊に手を付けさせず、老婆も寺に通夜、小学校の建築材料で棺を造り、寺僧は読経に声を枯らす。此の床しき村民の美風は交通隔たり他国人の出入りなき為にして別天地の観あり。
明治45(1912)	1	4	濱口しか女 志摩郡片田村	片田村しかは蟹婦もやり、志摩郡第2番目の高齢者で103歳。早起、食量一定、70余年葉に親みなく、数年前売薬2包を服用せしのみ、嗜好物は煙草で他の趣味はない、以前は生魚を忌むが現今は大に好み嗜好の一となるも、衛生を重んじ多食せず。煙草も失火を虞り昨年禁煙。人物温和、氣受け宜く和氣に包まれる。
明治45(1912)	4	23	稀代の珠貝代価二百円	安乗村山山忠五郎娘すまなる蟹婦は、同村漁場「には」海面で得たる鮑のうち3寸以下の鮑あり、本県規則では3寸以下のものを捕り、売却することを得ざる故、我食用に供せんとするに、金色の珍珠現れる。世間に知れ、此程銀座四丁目御木本真珠店より200円で買入を申し込むが、家宝として子孫に伝えることに定め手放さざる由。真珠に優る光沢あり、美々数名珠なりと。
大正1(1912)	8	17	海婦の溺死	度会郡鶴倉村大字賢浦の大野まつ(30)は、昨14日、夫利吉及び外2名と漁船に乗り、見江島で鬼草を採取中、激浪に浚われ岩石で負傷、喰切り虎尾魚(うつぼ)と称する漁族に襲われて海底深く沈み、溺死を遂ぐ。
大正1(1912)	10	6	節婦浦口糸い斯民会被表彰者	今回三重県斯民会が表彰した布施田村の浦口糸いは、25歳で静口清次郎という少学教員の後妻に入り、無理難題を言う姑にも孝養を尽くし、一男一女を産む。明治38年に夫が病死、農業、蟹婦、賣仕事、豆腐作りなどで働き、税金や報国勤儉組合の貯金、地下頼母子掛金などに充て、姑や子供の世話、実家の家族の世話まで立派に勤め上げた節婦である。
大正1(1912)	12	22	志摩物語(四)	御座村には海運で有名な不動明王があり志摩以外からも参拝者が訪れる。旧暦2月の頃より旧盆に至る期間、村の婦女の十中八九は紀州地方へ出張に出かけ、海藻と鮑を採集。一人前の収入は7、80円から100円位。この時期の村の女は婆さんか子供。青年会は加茂村に次ぐ発達、村長山本伊右衛門父子の将棋は有名。
大正2(1913)	4	14	海の女(一) 妙齢の身で裸生活 嫁入衣装は白湯巻	白湯巻一枚の婦人が幾千人、志摩の美しい風景に包まれて居る。二千年の昔、倭姫命以来毎年6月に伊勢神宮に鮑奉納。蟹婦の稼業は夏季に限られず、雪の降る日も白湯巻一枚で海底作業に従う。月収24、5円あつても着飾らず裸体生活を続ける。月収は10円を最下。呼吸の長く続く事が最も必要。
大正2(1913)	4	15	海の女(二) 妙齢の身で裸生活 嫁入衣装は白湯巻	湯巻は白に限る 海面に浮上すると口笛を吹き美妙的音楽を奏す。決して赤い湯巻きを締めず、誰も白湯巻。海水の中では赤より白が目立つため。船上の水夫は白湯巻を目当てに長い竹竿を投げ、蟹婦は此竿を力に浮かぶ。竹竿の緩急、呼吸の合致が大切で、多くは夫、あるいは兄弟、父が水夫を務める。4、50秒潜り、鮑を浮桶に入れ、また潜ることを1時間に数十回。浮桶の鮑が4、5貫目になると一旦船上に上がり、微温湯を肩から浴びるか、上陸して蟹婦小屋の焚火で暖を取る。和具村では年収5千円に達し、布施田村、国崎村、答志村、神島村、相差村等でも蟹婦作業を奨励、蟹婦でない女は一人もない。10歳以下の少女も磯辺の海苔や貝類を採取する。蟹婦を嫁がねば村の若者が相手にせず、嫁入りも出来ない。
大正2(1913)	4	17	海の女(三) 妙齢の身で裸生活 嫁入衣装は白湯巻	志州沿岸では女を尊び、女房が妊娠すると女子が産まれることを神々に祈るほど。蟹婦になるべく、伊賀伊勢から養子に買われて来る女も多い。分別もない5、6歳の頃に4、5円で売買される。直ぐに海藻や貝類の採取に使役され、16、7歳の頃には一人前の蟹婦となる。彼女等は石花菜採取に紀州へ、また満洲、朝鮮に海藻採取に行き、豪州沿岸で数百万の母方を海底に配置し真珠養殖や真珠取りの稼ぎも。志摩郡は男が少ない女護島、稼ぎがなければ良人を得られず。蟹婦の楽しみは寝屋、若者共と同宿。昔からの風俗で嫉妬喧嘩も起らず。結婚しても白湯巻のまま、持参品は浮桶くらい。里返りしても休まず働く。
大正2(1913)	5	31	寒天産況と輸出	我国特有の産物寒天の原料石花菜は、近年産額減退、朝鮮台湾の「オゴ」という海藻を混用し製品劣悪に。だが海外向けの需要は伸び、農務省の調査では海外輸出総額164万円余。輸出先は中国、印度、露西亞、英仏米など全世界に及んでいる。
大正2(1913)	8	13	真珠大養殖場発見	神明村山山本常右衛門は朝鮮海方面で真珠養殖場の発見に苦心していたが、転じて対島の海岸線を踏査し、上縣郡豊崎及び琴の岡村で蟹婦を潜水させ、海底に美麗なる阿古屋介を発見。交渉の末、漁業権を譲り受け長崎県知事に出願。58万坪を20年間、3千円で買い受ける。淡水の流下が少なく、阿古屋介内膜の光沢は神明村に比し幾分劣れるが、養殖場としては極めて適当な場所。



大正2(1913)	11	22	志摩巡礼(十九) 青年の誇りと処女の働き	神島の人口は880人。若者組を改めて青年会に。最も誇りとするは難破船救助。一度法螺貝を吹けば皆海岸へ駆けつけ、直ちに決死隊を組んで救助にあたり、海上荒れる時は青年が海岸に出、行き交う船の安否を伺う。処女は8月から2月まで三州豊橋地方に出稼ぎ。小学校卒業後一年を経た者。3月から漁期の間は熊野地方へ蟹に出かけるものも。
大正2(1913)	12	2	志摩巡礼(二十八) 漁村の婦人	相差村では男は海で働き、留守を守る女が中心となって農業や木樵その他の仕事に従事。「男一人養ひぬ位の女では」とも。青年会のおもな会員は処女で夜学や講習会を受けている。海藻採取も処女が蟹となり青年はこれら運ぶという有様。
大正2(1913)	12	11	志摩巡礼(三十三) 波切海岸	波切村は志摩で一番景気の良い魚市場が朝晩2回開かれる。女子が長生きで、また蟹として他地方から貰う習慣があるので、男子2千300人にに対し女子の方が900人も多い。自家に宿泊できないため、志摩特有の寝屋という宿所が生まれた。
大正2(1913)	12	18	志摩巡礼(三十七) 和具の蟹	和具村と布施田村の海境は旧藩時代からの争地、明治30年に大争論、各々10万余円を費やして法廷上の争いに。結果は布施田村の所有との裁許で和具村は困窮。だが村民は勤勉、娘等は蟹となり素晴らしい働き、朝鮮まで出稼ぎに行くこともある。飽取りで日に、80銭から1円4、50銭。3月初旬から海中に潜るが、結水中に潜ることも。
大正2(1913)	12	19	志摩巡礼(三十八) 蟹の朝鮮行	数年前、朝鮮に出稼ぐ蟹50名の送別会が開かれた。心配をかせぎせぬ為乱暴狼藉を働く女もいたが、出発間際には家族との別れに涙を流し、漁にも出ず安否を祈る。翌年1人7、80円から100円内外を儲けて帰ってくる。
大正3(1914)	1	30	朝鮮漁業と本県人	河芸郡出身で朝鮮漁業地曳網で成功せる丹羽幸太郎氏は、此程帰来、県庁農商課で朝鮮での三重県漁民の活動を語る。網主53人、従業者513人、他。志摩度会両郡より蟹婦出稼ぎ者200人。1年100円と見積もり2万円の採獲。地曳網、打網の活躍。
大正3(1914)	2	18	志摩漁業改良	志摩漁業は海藻採取に重きを置く小規模近海漁業。海藻養殖のため磯焼けと不漁の影響があり、漁村救済と漁業改良を目的として漁業組合の理事会が開かれ、漁船設備完全化、海藻繁殖に移植等の実行を決する。
大正3(1914)	2	28	在鮮本県漁民の勢力	朝鮮に於ける本県漁業団は非常の勢力。初めて出漁は河芸郡豊津村丹羽幸太郎氏、明治38年度と39年度の交。当時渡鮮者中の有力者、宇治山田市河崎町竹村勘太郎氏が組合組織。網数、従業者、漁獲高の統計一覽。
大正3(1914)	4	30	済州島の惨事	済州島の蟹130名は蔚山湾の海藻採集のために4月15日に出船したが、巨文島付近で暴風に遭い漁船が転覆。乗組員全員が行方不明となり、後の捜索の結果90名の死体を発見した。
大正3(1914)	6	18	鮮海漁業一斑(一)	朝鮮漁民の漁具漁法は不完全で幼稚。進歩せば漁獲拡大。沿海漁業の現状。沿岸では婦女子も出漁、全羅南道方面では海藻類採取多。漁民や漁船の数等。県別一覽で三重県は船数82、漁業者363人、漁獲概算高102,040円。
大正3(1914)	6	19	鮮海漁業一斑(二)	三重県漁業従業者の朝鮮における状況。本県遠洋漁業団は鮮海出漁団体と蟹婦移住漁業団併合によって大正元年に組織。釜山に出張所。船具輸出入、免許出願等一切の便宜。専務理事。答志村中村松助氏の成功は漁業年額数千円のほかに雑貨商、家屋を建設して貸付、斬髪屋や料理屋に。
大正3(1914)	6	20	長島通信(北牟婁)	目下蟹女の採草期に属し、採獲額多量なり。
大正3(1914)	7	27	鮑採捕制限改正請願	本県漁業取締規則では蓄殖保護のため鮑の太さ3寸5分以下の捕獲を禁ず。だが水眼鏡の弊害で蟹婦が制限以下の物を採取してしまう場合や、訓練中の14～5歳の海女が浅瀬貝類と判別出来ない事もある。2寸5分以上ならば養殖に支障がないことを漁民の間で確認。安衆・国府・甲賀・志島・群名・名田・波切・舟越・片田・布施田・和具・越賀・御坐の漁業組合より制限を2寸5分に改正する請願書を三重県知事に提出。
大正3(1914)	8	4	海女の溺死体捜索	北牟婁郡九鬼村浜口八平の長男種夫(5)、海岸で行方不明。青年団総出で捜索も、岸深く発見せず。急遽尾鷲町森興四郎氏の海女大カツギ8名、土地滞在の海女都合20余名を頼み捜索するが、発見ならず。
大正3(1914)	8	5	志州渡鮮漁民情况	志摩郡漁民の朝鮮出漁は毎年4月中旬より11月中旬、婦人は蟹婦となり石花菜と鮑採取。男子は鳥賊肌、地曳網。同地方の合資会社他から雇用。旅費は雇主の前貸し、日給35銭～4、50銭。月給8円～11、2円内外に漁獲代金の3分1～1割。男女共5、60円～80円を貯金して帰郷。波切・鏡浦・片田・布施田・和具・越賀の出稼人員数一覽。総計男18、女118名。
大正3(1914)	8	11	伊勢湾周遊(三)	答志、昔島、神島を右に見て、伊勢湾の入口へ。船の上から偶然蟹女の作業を発見。木の葉の様な漁船からコボレ落ちる姿。絵にある蟹女は雪の肌に紅燃ゆる腰巻、詩趣ある美人だが、真の姿は黒く逞しい体格。
大正3(1914)	11	8	溺死漁夫発見	志摩郡志島村漁業吉岡惣吉(38)、国府村南原惣助船に乗り前浜沖で蛤巻漁業中転覆、惣吉は行方不明に。志島村青年団と同村蟹婦10名等が死体捜索に着手。甲賀境田尻海岸で発見。
大正4(1915)	3	12	海女三百人渡鮮	志摩郡内より今回朝鮮渡航を志願した蟹婦は230人。長岡村20人、片田村60人、布施田村8人、和具村70人、波切村30人、越賀村50人。
大正4(1915)	4	23	渡鮮漁業者増加	本県の朝鮮移住者は逐年増加。越賀村伊藤太作、浜口幸助、山際政次郎ら。今亦神明村三橋三吉外十数名移住。志摩海婦は年々約200名ずつ渡鮮。使役者が県外者ゆへ減少傾向。だが県民で朝鮮漁業経営者が出てきたため今年は約400人の渡鮮を見るべし。
大正4(1915)	5	3	志摩海女団渡鮮	志摩海女120名一団が朝鮮江原道出稼ぎに出発。先月29日朝、下関に到着、同夜渡鮮。
大正6(1917)	10	8	秋豊と真珠介	布施田地方秋豊豊漁。真珠養殖場は赤潮の浸入を受け損害甚大。漁業組合は蟹婦200名余を雇い毎日3、4千貫ぐくらいずつの真珠介を採取、一貫約10銭相場で組合に買入、近々中に公入札の由。
大正6(1917)	10	17	濱島の真珠介採取	濱島村は去月来赤潮襲来のため真珠貝に莫大な被害、組合は片田、布施田、和具から蟹婦180人を雇い入れ、真珠貝を採取。死介数約7千、損生介2千3百貫、稚介千貫ばかり、金高4千5、6百円に。来夏の入れに附すると見積もれば約1万5、6千円の損害と。
大正7(1918)	1	18	全村に蔓延る墮胎の悪風	「蟹の里人」からの投書。働き盛りの海女の墮胎が習慣化している村の風習の摘発。50銭から3円位の手術料。海産物の採取期には妊娠している者の十中八九が墮胎。
大正7(1918)	2	5	朝鮮総督府第四種許可漁業(漁船使用で鮑、ナマコ、サザエを採捕する標潜漁業)につき志摩郡から通漁する海女団が許可出願。佐詰業者も。総督府は決裁に先立ち関係者を釜山会に赴かせて協議予定。農商工部及び水道産課も吏員を出張させ、両者の意見を聴取した上で許可の運びに至るとのこと。	



大正7(1918)	7	30	志州神明浦に赤潮来	去25日、御木本真珠養殖場の蟹婦は神明浦で養殖作業中、同所海底で赤潮の混流を発見。
大正8(1919)	5	13	志州船越通信	船越村漁業組合で5/5〜7まで真珠貝干3百貫採収。売得金千余円から蟹婦に100円を控除し、残金は氏神遷宮式経費に寄付することを決定。
大正8(1919)	7	22	鮮海出漁状態調査	奨励の結果、志摩郡から朝鮮出稼増加、同地の漁況や蟹婦の状態を詳知する必要を認め、情勢調査のため漁業組合連合会理事大野超五郎氏は21日に現地へ出発。25日間、協定実行の有無、漁獲状況、事業家の蟹婦への態度、待遇、労働時間、衛生設備、食費、部屋、事業家への感想、一日平均採鮑数量、船頭氏名、缶詰業者等についてを調査予定。
大正8(1919)	7	29	濱島鮑大漁	濱島湾内の鮑漁は去6月頃より日々豊漁続き、同村の蟹婦約2〜30名は1ヶ月の収穫高一人150〜160円にも上り、同漁村は大活況を呈している。
大正8(1919)	11	4	志摩前島通信	前島沿海での荒布類採取は前年より稍豊況だが、沃度下落のため収支計り難きとの風説、現物入札の処、1円に荒布10貫内外、アンロク(沃度用)9貫目内外、採取蟹も相当の収入あるべし。
大正9(1920)	3	1	北牟婁沿岸石花菜採収事業 町村自営計画	北牟婁郡沿岸の石花菜採収事業は毎年競売入札をするが、尾鷲町小林興四郎、長島町東茂七・松田某、三野瀬村石原庄之丞の4人で協定、区域を定め低額入札で利益。一部の有志から余剰収益について町村財政を補うとの意見や、答志島、御座の海女組合から賃金引き上げ要求、寒天の輸出額大幅低下などで経営悪化し入札が厳しい状況。町村当局者は事業自営計画を調査、交渉中。
大正10(1921)	3	5	県衛生課の新しい試み 蟹婦の保健調査	健康長寿のものは多いが生産力は乏しい。三重県衛生課は県内で最も死亡率の多い員弁郡稲部村と最も少ない志摩郡御座村で土地、気候、風俗、食品、労働時間、井水の良否等について衛生的調査を実施。志摩郡内の海女一同に臨時の健康診断、生活状況を調査。長寿者は寒海中で作業する蟹婦であることが判明。志摩郡に蟹婦が1200余名いるが、何れも体格優良、皮膚も丈夫。しかし生産力には乏しく、遺伝性かと思うが原因は調査中。
大正10(1921)	3	24	沈没船積載の銅粉に中毒し志摩近海の鮑悉く斃死す	被害区域千間四方に及ぶ。長岡村大字相差の大瀬戸、前濱方面で蟹婦採取の鮑が悉く斃死、志摩郡役所へ報告、同郡産業技師中島秀男氏調査、鮑の臍から青銅色の鉱物が発見。3月13日に同所で沈没の高知県の船積荷銅粉が海に広がり、鮑が中毒死と断定。相差を始め安乗・国崎など鮑産地への被害は夥しく、損害高は高額、相差だけでも1万円以上に。
大正10(1921)	8	4	蟹婦の生活 人魚の戯れに似た美しくは無くとも潮潜る雄々し海の女よ	水に慣れ海の香恋しい酷暑の夏も、潮も氷らん寒さの冬も、海中に身を躍らす海の労働者。荒くれ男に劣らぬ海女。答志、安乗、志島、船越、片田、布施田、和具、越賀の村々700人以上の海女は普通教育卒後、17、8歳の頃まで近海で練習、次第に深海の作業に従事。魔除け縫い手拭を絞り薄い胴着を纏い水中眼鏡で鑿鎌金槌を携え、12、3尋から24尋もあろう海底へ潜っては水面に浮かぶ。海女の労賃は月に14、5円から7、80円。出稼は収穫よりも変わった土地で自由な活動を喜び働く。朝鮮側が潜水機を利用して排斥を試みたこともあったが、今は海女を待たねば作業が出来ない。全国海藻・海魚・真珠採取は海女の独占事業。
大正11(1922)	5	5	北郡鮑貝養殖試験	北牟婁郡では沿海に繁殖している鮑介の成長度を試験するため先年より九鬼村湾内にて作業しているが、近々松下水産技手が同村に出張し、海女を使用して鮑の採捕を行う由。
大正11(1922)	8	23	漁夫死体発見	磯部村山田、当時名切村中井市松方寄留漁夫が鰯漁業中、沖合で転覆溺死。同村の蟹婦数10名が出勤し捜索、死体を発見。
大正12(1923)	5	6	望遠鏡で海女の作業御覧	鳥羽巡行の良子女王(香淳皇后)は、橘の山に登り休憩所の台湾館にて同館備え付けの35倍望遠鏡で、3里を隔つる答志島の海女の作業を手取る如く見ゆるを感興あり、柴田知事に色々御下問。
大正12(1923)	6	9	朝鮮沖に雄飛する志摩の蟹女の群 今年に僅に四十名	5月頃から朝鮮近海出漁蟹女の視察に神島志摩郡長は元山浦付近より鎮南浦方面に出張視察。本年出漁海女数は僅か40名余。明治24年に朝鮮出漁開始後多い時は350名と比べ減少の原因は、漁獲物価格が騰貴し、朝鮮に出漁せずとも相当賃金を得られるためかと推測。だが蟹が朝鮮出漁期間中に稼ぐ金額は200円〜600円に上る。出身地は和具、越賀、布施田、安乗、船越。長崎五島方面からの蟹も多数出漁するが、志摩蟹女は深海の採捕に秀でた技術を持っているため評判が良い。
大正12(1923)	6	21	朝鮮出稼の蟹女の状況 神島郡長の視察談	元山から25里隔たる長節は最も多く集合(3隻37名)。大津里は2隻27名、金剛山麓の莊湖里には2隻22名、3地方合計86名が従事。どの地方も交通の便は非常に悪い。出稼蟹女の日常生活は大体が船中にあり、陸上では缶詰業者が設備。生活費を控除して600円位を持ち帰る。
大正13(1924)	7	6	危い命を蟹婦のお蔭で助かる	波切村松井五郎二女が水泳中に誤って深みに沈み溺れかけていたが、蟹婦が発見し海中に潜り救助、村医の来診を乞い人工呼吸の結果、何とか一命を取り止めた。